“限定”“特定”“地域性”が、プレミアムをうむ。

相次ぐ大型台風の上陸、そして新潟県中越地震の襲来と、地方にとって試練の多かった1年が過ぎようとしている。なかでも台風の襲来では、北日本も大きな被害をこうむった。海風による稲作へ塩害、強風による果実の落下…。文化財級の樹木の倒木も相次ぎ、歴史の保存や観光の振興にも深刻な影響が出た。札幌の観光スポットともなっていた北海道大学のポプラ並木も、大きな被害を受けた名勝のひとつ。筆者が訪れた10月中旬、並木道は閉鎖され、倒れたポプラが無残な姿をさらしていた。並木道の入り口にたたずむ新渡戸稲造の胸像もさびしげな表情に感じたのは、筆者だけであろうか。今回の『流通・通』は、そんな北海道から地域を元気にしようと頑張っている取り組みを追ってみた。

地域限定で特長を出す!

札幌といえば、「時計台」「大通り公園」「すすきの」など特色ある街の風景が思い浮かぶが、開拓によって切り開かれた新しい都市らしく、駅前から整然と区画された街並みが、美しい北国の風情をかもし出している。北海道大学のポプラ並木もそうだったが、時計台や旧庁舎などの存在が異国情緒を感じさせるのも、札幌の魅力のひとつといえよう。そんな札幌の街角にも、今ではコンビニがひしめき合っている。画一的な品揃え、24時間営業の利便性…。いや待てよ、筆者が立ち寄ったコンビニには、おもしろそうな商品が並んでいた。いわゆる“地域限定”とうたった商品群!そう、“群”なのである。ひとつやふたつではない。

たとえば『夕張メロンキャラメル』といった地域の特産品を活かした商品だけでなく、ナショナルブランドと連携した限定商品も目につくのだ。そのひとつが『サッポロビールキャラメル』。サッポロビールから使用許諾を得て、『サッポロ生ビール黒ラベル』のラベルデザインそのままに、北海道の企業が商品化した。もちろんラベルだけなく、商品にも『サッポロ生ビール黒ラベル』を使用しているという。もうひとつ筆者の目を惹いたのは、日本たばこ産業の『HOPE SUPER LIGHTS』。『LIGHTS』は岩手県内でも販売しているが、『SUPER LIGHTS』は北海道限定の商品だとか。パッケージのデザインは『HOPE』シリーズと同じだが、白地にゴールドとシルバーで描かれたシンプルな仕上げは雪国・北海道を象徴しているようでもあり、タバコを20年以上前にやめた筆者も思わず記念に購入したほど。こうした地域限定の商品開発は、小規模の事業所や店舗単独では難しいかもしれないが、数社あるいは商店街が連携して取り組むことは可能なのではないだろうか。あるいはオリジナルのフィギュアなどを企画しても、おもしろいかもしれない。

特産を活かして特色を出す!

北海道で見つけたキャラメル、上記以外にもまだまだユニークな商品が並んでいた。たとえば、チーズ味のキャラメル、バター味のキャラメル…。いずれも酪農王国・北海道を連想させる地域の特色を活かした一例といえるが、それ以外にも地域の特色を活かしたさまざまな取り組みが目についた。筆者が次に訪れたのが、道東の港町・釧路市。釧路といってすぐに思い出すのは、釧路湿原ではなかろうか。もちろんそれも魅力のひとつには違いないが、今回筆者が関心を寄せていたのは、釧路市が平成元年に全国に先駆け建設した「フィッシャーマンズワーフMOO」のその後であった。建設当時は港町の地域活性化の切り札として全国から注目を集めたものの、各地の第三セクターと同様、バブル経済崩壊の影響を受けて苦しい経営を強いられてきたようだ。最近の報道では、金融機関との話し合いもついて再生に向けた取り組みが始まろうとしているとか。

釧路市で見つけた商品が、『さけひれさけ』。干した鮭の鰭と日本酒をセットにして販売している地酒である。フグの鰭を使った「ひれ酒」の鮭版といったところ。鮭の鰭を電子レンジで温め、そこに日本酒を注ぐ。鮭の漁獲量が全国有数の北海道ならではのアイディアではないか。もうひとつが、釧路ゆかりの文人・石川啄木にちなんだまちづくり。啄木にはいろいろな逸話が残り、人物に対する評価はさまざまあるが、釧路では啄木の文学的才能を評価して検証し、まちづくりに活かしている。一本一本に啄木の短歌が刻まれた街路灯、啄木の顔がプリントされた「たくぼくバス」の運行等々。供給者側の価値観ではなく、消費者の嗜好をくすぐる取り組み。それも地域や店に人を呼ぶ、りっぱな“商品”なのである。

経営コンサルタント　岩渕公二
(ジーベック代表取締役)